

---

# Bringer

黒木猫人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Bringer

### 【Nコード】

N3060I

### 【作者名】

黒木猫人

### 【あらすじ】

俺が置き傘を持って来るのを忘れたことは一度もない。置き傘をお題にしたショートショート。

置き傘を持って来るのを忘れたことは一度もない。

高校のクラスメイトの男子には「小林、お前って本当にマメだよな」とか言われるけど、それは大きな間違いだ。

俺は本当は忘れっぽい性格なのだ、むしろ。

「はあ……」

朝の教室。

今日も持つて来た折り畳み傘を見つめ、溜め息を吐く。

「よっ、おはよ、小林」

背中を叩かれて振り向くと、肩からスポーツバッグを下げたクラスメイトの荻原千夏さんが立っていた。

「あ、ああ、おはよう荻原さん」

何かと肌寒い梅雨の時期だというのに、一人夏服が眩しい。涼しげな首元やら、健康的な二の腕やら、短いスカートから覗く太ももに思わず目が行く。

ただでさえ万人が振り返るような容貌をしてるにも関わらず、そんな出で立ちであるから、不可抗力ってやつだ。仕方ないじゃん！けれども、荻原さんにはちっとも自覚がないようで、ジト目で睨まれた後、

「……目がエロい」

「そ、そんなことあるわけはあッ!？」

容赦なく殴られた。

椅子ごと仰向けに転倒する。

「全く、外は寒いし、小林の目はエロいし、気分悪いわ!」

俺の左隣、窓際の席にドカッと腰掛ける荻原さん。

とりあえず、長袖を着て下さい。

荻原さんの視線の先、何気なく見た窓の外は、灰色の曇り空だった。

雨の野郎、放課後を狙っていたかのように、どっと降って来やがった。

私は傘なんか持って来てないってのに。

おかげで陸上部は休みになってしまったし、やることもない。

仕方なく私は、高校の二年生玄関で雨宿りをしながら、一向に退きそうもない雨雲を見つめている。

「あれ、荻原さん？」

胸の内をくすぐられたような感じがして身震い。

下駄箱の方を見やると、同じクラスの小林が立っていた。

ルックス普通、成績中の上、運動神経普通、特徴工口い。時々無性にムカつくヤツ。

「……小林、何か用？」

背後から奇襲された気がして、声に棘を生やす。

「ああ、いや、玄関に立ってどうしたのかなって……」

「見て分からない？ 傘を忘れたのよ」

「傘を？」

私の横に並んだ小林は、空を見上げて、

「う、うわー、凄いとしゃ降りだー。こりゃー、止みそうにないね」

「アクセントゼロの棒読み。」

「……」

「……え、え」と

小林は折り畳み傘で、ポンポンと自らの肩を叩く。

「……相合傘なんて死んでもやらないわよ」

「め、滅相もない！」

両手を振った小林は、私に折り畳み傘を持たせる。

「よ、良かったら使ってよ。俺、まだ余分に折り畳み傘持ってるか

らさー！ 何なら貰っちゃってもいいし！」

「ちよつと待て。何で私があんたの」

「じゃあ俺、教室に折り畳み傘取りに行つて来るから！ また明日

！」

「あつ、コラ！」

小林は靴を脱いで、さつさと昇降口の方へ消えて行つてしまふ。

押し付けられた折り畳み傘を見る。

青い無地の、地味な折り畳み傘。

「何で私があんたの……折り畳み傘なんか差さなきゃなんないのよ

……」

仰ぎ見た灰色の雨雲は厚く、今日はもう陽の光を拝めそうにない。

すっごいムカつく。

折り畳み傘を開いて、雨の中を歩き出す。

足を止めて、振り返つた。

「意気地無し」

別に深い意味なんか、ない。

翌朝の天気予報では、本日は終始晴れが続くとのことだった。

さすがに折り畳み傘を持って行く必要はないだろう。

家の外に出れば、全天に澄んだ青が広がっている。雲一つない。

俺は軽快な足取りで学校に向かった。

教室に着くとまだ誰もいなくて、時計を見れば、いつもより大分

早かった。

「んー！」

席について、大きく伸びをする。

それにしても、昨日は荻原さんに上手く傘を渡せて良かった。

これで少しは

「小林」

呼ばれて振り向くと、荻原さんが教室に入ってきて来るところだった。

「あっ、荻原さん、おはよう」

「……おはよ」

何故か目を反らす荻原さん。つかつかと窓際の席まで移動し、大きな音を立てて椅子に腰掛ける。机に肩肘を着き、視線は窓の外へ。横目でそれを眺めていると、

「これッ！」

怒鳴り声混じりに折り畳み傘を突き付けられた。

「お、荻原さん？」

「昨日の傘！ 返す！」

「え……」

「な、何よ、変な顔しないでよ！ 私だって借りた物ぐらいちゃんと返すわよ！」

荻原さんは咳払いをし、

「と、とりあえず、昨日はその、一応、た、たす……」  
気のせいかな荻原さんの顔が赤く

「小林くん」

その時、教室の扉の方から声が掛かった。

見ればクラスメイトの女子達で、「おはよう」と手を振りながら、こちらに近付いて来る。

「昨日は折り畳み傘ありがとね。小林くんのおかげで助かったかな」

「あはは、困った時はお互い様だから。たまたま折り畳み傘が余分にあっただけだよ」

「小林くんって本当にマメだねー。今度私も貸して貰っちゃおうかな」

「あ、本当に？」

それは何とも嬉しい申し出だ。

「こっば〜や〜し〜！」

「へっ？」

振り返ると。

今度こそ気のせいでも何でもなく顔を赤くした荻原さんがいて。

ああ、何て言うか、熟したリンゴみた

「バカアアア ツ！！！！」

「何故にツ！？」

思いっきり殴られた。

うつ伏せに倒れて気付いたことだけでも、教室の床って意外に温かいんだね。ぬふーん。

荻原さんは「死ね！」と大声で怒鳴り、教室を出て行ってしまった。

女子達は「小林くんも大変ね」「頑張ってるね」と不可解なエールを送ってくれた。何のこっちゃ。

「おっす小林、昨日は傘助かったぜ！……って、何やってんだ、お前？」

かろうじて顔を上げれば、そこにいたのはこれまた折り畳み傘をあげたクラスメイトの男子。

俺は再びうつ伏せになる。

もう駄目。腹筋が疲れた。

「……学校に何十本も貯めてたツケが回って来たらしい……」

置き傘を『持って来るの』を忘れたことは、一度もない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3060i/>

---

Bringer

2010年10月8日15時29分発行